

『不知火海沿岸』と水俣「奇病」：初期水上勉論 第一回

著者	田村 景子
雑誌名	表現学部紀要
巻	18
ページ	184-173
発行年	2018-03-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004533/

『不知火海岸』と水俣「奇病」

初期水上勉論 第一回

田村景子

要旨

鹿苑寺金閣への放火をめぐる、二人の作家が対峙する。金閣に魅入られた少年の心象を挟った三島由紀夫と、小僧時代の記憶から三島の小説『金閣寺』（一九五〇）を兵卒の視点をもたぬ元帥の美学だと切つて捨て、小説『五番町夕霧楼』（一九六二）と『金閣炎上』（一九七九）を書いた水上勉である。

同時代に活躍し金閣で交わった両者は、しかしその後、あまりにも遠ざかる。前者は、言語と行動による日本的なものの美的固定を目指し、散った。他方後者は、戦中戦後の動乱の中で書き、「小さなもの、弱いもの、貧しいもの、苦しむもの、憤るもの」へ寄り添って、八十五年を生きた。水上勉の「金閣と水俣と原発」とも名づけ得る戦後をとらえることは、戦後という同時代に対して批評性をもちえた三島由紀夫的な美学に、疑問符をつけざるを得ないポスト戦後の現在においてこそ意味があろう。

本稿は、水俣病ルポルタージュの最初期ともいえるべき初期短篇小説『不知火海岸』の成立経緯を追うことによって、作家水上勉の全体像「再発見」を始める試みである。

1 水上勉の「再発見」

水上勉（一九一九～二〇〇四）の「再発見」が続く。

『戦争と文学』全集第七巻『ヒロシマ・ナガサキ』（二〇一一）には、故郷若狭での原発作業員の不安がとらえられた「金槌の話」（一九八二）が収録され、早い時期の原発小説として話題になった。二〇一七年には、原発をめぐる小説、エッセイが集められた『若狭がたりわが「原発」撰抄²』が出版された。

二〇一一年三月一日の福島第一原子力発電所事故によって、原発の破局的なまでの危険性は誰の眼にも明らかとなった。原発をめぐる「安心、安全」が神話というよりフェイク（虚偽）であるのはつきりし、そんな虚偽に抗して原発の危うさに警鐘を鳴らしてきた文学者たちの仕事は、「再発見」された。水上勉はその最も重要な作家の一人であり、故郷若狭に建ち並ぶ原子力発電所を、長く見つめ静かに告発し続けた文学者である。

「間の抜けた話だが、終戦の日、八月十五日」と始めたエッセイ「金閣と水俣⁽³⁾」(一九七四)において、水上勉は自身の戦後史を、タイトルに並ぶ二つの出来事に仮託して語った。そうであるなら、一九七〇年代から死に至るまでつづく原発との長いかかわりを思うとき、水上勉の戦後は「金閣と水俣と原発」と名づけられてよい。

しかもこれら水上勉の金閣、水俣、原発は、核心にいわば「小さなもの、弱いもの、貧しいもの、苦しむもの、憤るもの」が息づいており、故郷若狭における原郷のイメージがそれに重なる。

「大きなもの、強いもの、富むもの、楽しむもの、奢るもの」が、政治、経済、社会の全領域で再び言祝がれはじめた昨今、原発告発作家としての「再発見」はもとより、「大きなもの、強いもの、富むもの、楽しむもの、奢るもの」を厭い、それらに背を向け、「小さなもの、弱いもの、貧しいもの、苦しむもの、憤るもの」に絶えず寄り添うことを願った水上勉の、文学者および宗教者としての全体像の「再発見」にまでとどかねばなるまい。

ここから始める長い試みは、そんな全体像としての水上勉の「再発見」をめざす。本「初期水上勉論」では、私小説『フライパンの歌』(一九四八)の後、文学を離れた水上勉が、書き下ろし推理小説作品『霧と影』(一九五九)で復活し、『海の牙』(一九六〇)、『火の笛』(同)など次々に推理小説を発表ながらも、「人間」描出の不充分さにいらだち、一九六一年に第四十五回直木賞を受賞した「雁の寺」や『飢餓海峡』(一九六三)で、推理小説と私小説との独特な結合をはたす一九六〇年代中頃までを対象にする。

その第一回となる本稿は、『霧と影』で推理小説の新たな書き手と

して文学界に躍り出た水上勉が、ある夜、NHKテレビのドキュメンタリー・シリーズ「日本の素顔」第九十九集「奇病のかげに」を観て驚愕し、翌日水俣へ発ち、現地で二週間ばかりの見聞、取材を経て、惨憺たる「奇病」を推理小説の形式で捉えようとした短篇「不知火海沿岸」(一九五九)について考察する。「不知火海沿岸」は従来の水上勉論および研究において、長篇『海の牙』の習作あるいは『海の牙』に吸収されるものとしてのみ扱われてきた。しかし、後に引く水上勉自身の言葉もあるように、二つの作品は同じ事態を扱った別種の試みであったといったほうがよい。

水俣「奇病」という出来事に直面した水上勉が、最初に作品化した「不知火海沿岸」で試みようとしたことを、まず、作品をめぐる水上勉の意図から考え、次回の「不知火海沿岸」論へとつなぎたい。

2 「文学よりも必死なもの」から新たな文学へ

貧困からくる主人公の焦燥と哀感、および巧まざる滑稽味とが融合した私小説作品『フライパンの歌』(一九四八)が評判となつて文壇に登場した水上勉は、以後十年、文学創作から遠ざかっていたが、あるきっかけから創作を再開する。

当時親しくしていた川上宗薫が、『硫黄島』で第三十七回芥川賞(一九五七年上半期)を受賞したばかりの菊村到をつれて、当時住んでいた松戸の家にきた。

得意の手料理で歓待する水上勉に、六歳年下の菊村到は言う。「あんな、小説書いてみませんか。あんななら書ける。期待しています」

よ」。その言葉を聞いて、「私は、十年近くわすれていた、小説を書く心に火を焚きつけられた」⁽⁵⁾（『文学的自叙伝「冬日の道」」）。

一九一九年の生まれの水上勉は、このとき三十八歳になっていた。十年間近くたまりにたまった創作意欲が、水上勉のうちに噴出をはじめた。しかしそれは、『フライパンの歌』での私小説の踏襲でも発展でもなかった。

もう自分は小説を書くようなことはないだろう、と思っていた。正直いって、十年前に書いた「フライパンの歌」だって、そのころ、よみ返してみると、冷や汗のするほど甘いものだった。不思議なことながら、洋服屋をやってみて、それがわかった。私にはだいたい、いい気なところがある。事物を的確に見つめる目が弱いうえに、かりに私なりに物を見る目があつたとしても、書きあらわすに、自分流の方法といったものを持ちあわせていない。その方法を手さぐりしてゆくうちに、なぜか文章だけが浮く。書きあがつたときは不的確なものとなっている。しかも、それが私小説の場合だと、たぶんいい顔して見える。嘘も書いている。その嘘が鼻もちならない。過去のいかなる文章を省みてもみなそうであつた。⁽⁶⁾

感情の揺れが意思の揺れとなり、方法の揺れ、文章の揺れとなつてあらわれる。そのぶれに直面しつづける動揺と困惑とを隠すのではなく、逐一漏らさず、むしろ堂々と曝けだす。沈重な戦後派の季節にあつて、それはときに「いい顔して見える」——『フライパン

の歌』で試みて、戦後間もない混乱と貧困の時代に喝采とともに受け入れられた、水上勉の体験的な私小説論が示されている。

では、なぜ水上勉は、『フライパンの歌』的な私小説に戻らなかったのか。引用文の途中にあらわれる、「不思議なことながら、洋服屋をやってみて、それがわかった」に注目したい。この「洋服屋」体験が、遠ざかりつつあつたもののそれまでかろうじて水上勉の維持してきた「文学」を激しく揺さぶつたのである。

『水上勉全集』末尾につけられた祖田浩一作成の年譜⁽⁷⁾から、「昭和二十九年（一九五四）」の項をぬく。「四月、友人と東京服飾新聞社を起し、北条誠などに連載小説を依頼。間もなく、不況のあおりで新聞社が潰れたため、洋服の行商をはじめた」。

「冬日の道」には続いて、洋服の行商人体験が、それまでの文学体験と対比される。

洋服を売る世界に、文学よりも必死なものがあつた。一例をあげると、こんなことだ。仕入れにゆく。卸し元は、正直なことをいってくれない。合織が交じっていても純毛の顔をして売りつける。こつちもつるしんぼを売る行商人だ。足もとを掬われるようなことが多々ある。だから、真剣だ。純毛と合織の違いくらいは、糸くずを舌の上においてわかるぐらいになつていなければならぬ。こつちの目がしっかりしておれば、卸し元もごまかしはきかない。一着売って千円そこそこの利益をあげるのに、命をかける。

こんな呼吸は、わたしの過去の文章にはなかつた。⁽⁸⁾

菊村到の言葉がきつかけとなった創作意欲の復活は、戦後続けたきた編集の仕事とは異なる、洋服の行商人としての日々の経済体験を介したものだ。

水上勉にとって、「文学よりも必死なもの」との出会い、しかし、「必死なもの」へと文学から抜けでていくことではなく、「必死なもの」をつつみこむ新たな文学的な試みへの挑戦となったのである。

ちょうどこの頃、文学も「経済」をつよく意識しはじめていた。

一九二七年生まれの城山三郎が、海外に派遣された商社マンの狂気にいたる苦難をえがいた「輸出」で、純文学系雑誌『文学界』の新人賞を受賞したのは一九五七年。その後、同時代の経済の暗渠に広く取材した『プロペラ機・着陸を待て』、「神武崩れ」、「総会屋錦城」などを次々に発表。「総会屋錦城」で第四十回直木賞（一九五八年下半期）を受賞した。

文学のジャンルのひとつとして「経済小説」が登録されるのは、城山三郎の登場以後である。

第一次戦後派の華々しい集団的な突出、次いで安部公房や三島由紀夫の登場を見た戦後文学は、この時期、戦後の混乱期、停滞期を経て高度経済成長期へと向かう大きな時代的、社会的変化の中で、庄野潤三、小島信夫、安岡章太郎、吉行淳之介ら第三の新人による日常性の文学へと傾いていた。もちろんそこに描かれるのは、めぐってきた経済的な安定に安堵するたぐいの浅く平穏で無事な日常ではない。むしろその日常は、深く、不安で、濃密であるとともに一寸先は闇的な日常であった。しかし、個人と家族をめぐるそれは、

いかにも限定的で狭い日常であり、同時代の社会的な広がり拒むものでもあった。

そうした純文学における傾向を嘲笑うかのように、一九五〇年代半ばから一九六〇年代はじめにかけて、大衆文学に新たなジャンルが次々にあらわれる。

城山三郎の経済小説、星新一、小松左京らのSF小説、山田風太郎の忍法小説、松本清張にはじまる推理小説（社会派推理小説）等である。

これらは、純文学が狭い日常へと文学的世界を閉じていくまさにそのとき、日常を食い破り日常の外へと文学的世界を拡張したといつてよい。

水上勉の「経済」への関心、すなわち従来の「文学よりも必死なもの」と思える同時代の社会的・経済的関係への関心は、自ら述べるように特に松本清張の新たな推理小説に刺激されたとはいえ、同時代における社会的な広がりにおいて、多くの大衆文学あるいは中間小説の作家たちの関心とつながっていた。

3 『点と線』に学び、「作者の恨みつらみ」をつめこんだ

水上勉は、明らかに異なる新たな創作意欲の噴出にうながされ、原稿用紙に向かった。最初は「箱の中」というタイトルだった。

繊維業界に起きたトラック部隊事件を材料にして、殺人のからむ、いわゆる探偵小説である。

ちょうど、この年は、松本清張さんの『点と線』が世評をあびていた。足利の駅だったか、売店で買い求めて洋服を網棚に上げ、むさぼるように読んだが、じつに面白い。荒唐無稽の探偵小説など、足もとに及ばない迫力である。謎解きのヒントも卓拔だし、殺人の動機も、人間がしたことらしい現実感があり、探偵小説も書き方によっては、作者の恨みつらみをつめこむことが出来る気がした。⁹⁾

松本清張の『点と線』の刊行は一九五八年二月、ほぼ同時に出た『眼の壁』とともにたちまちベストセラーとなった。

松本清張は一九六一年に刊行した『随筆 黒い手帖』の「推理小説の魅力」¹⁰⁾のなかで、自らの試みを「推理小説」と名づけたうえで、江戸川乱歩以来の「探偵小説を『お化け屋敷』の掛小屋からリアリズムの外に出したかつた」¹¹⁾と述べる。

「荒唐無稽の探偵小説など、足もとに及ばない迫力である。謎解きのヒントも卓拔だし、殺人の動機も、人間がしたことらしい現実感があり」という水上勉の指摘は、松本清張が「推理小説」としてもたらした新たな文学世界を的確にとらえている。

ただし、続く「探偵小説も、書き方によっては、作者のうらみつらみをつめこむことが出来る気がした」はどうか。松本清張の「推理小説の魅力」には、現実的な広がりのある推理小説の実現のためには、「作家的意図や姿勢」ではなく「作家の本質や追求性」¹²⁾が問題であるという指摘のほか、作者の思いについての言及はない。

「冬日の道」で水上勉は、『フライパンの歌』で出発した作家らし

い、「作者のうらみつらみをつめこむ」なる私小説的ともいえるべき思いをさらに補強するように、こう続ける。

それで自分が傍見したあの事件を材料にして、全然、事件とかかわりのない小学校教師が東京から遠くはなれた若狭の断崖で殺される。まさしく『点と線』と似た設定である。だが、この距離を埋めるのに、自分が過去に経験したいろいろの事どもを詰めこんでみよう。人物も然りである。『箱の中』は、そんな思いで書きだされた。¹³⁾

『フライパンの歌』の狭い生活世界を想起させもする「箱の中」というタイトルは、編集者（河出書房新社の坂本一亀）とのやりとりもあって、再三の書き直しの後、「霧と影」という、作品世界の謎めいた広がり的印象づける、当時の社会的な推理小説らしいタイトルへ変わり、一九五九年八月に出版された。

この作品の成功は、「箱の中」から「霧と影」へのタイトル変更も大きかったにちがいない。この変更にも、あるいは、時代の流行に敏感な編集者坂本一亀の「推理小説」のイメージがかかわっていたかもしれない。

水上勉は自らの作品について多く語る作家であり、しかもその都度、必要に応じて別の視点から語る作家でもあった。『霧と影』が朝日新聞社から出た『水上勉社会派傑作選』の第一巻目に収められるに際し、あとがきのような体裁の「『霧と影』『菓の絵』について」¹⁴⁾で、『霧と影』の成立について書いていた。

『冬日の道』で記されるのと同じく、『点と線』を読みその方法を勉強して書きだしたと述べたうえで、こう続ける。

先ず、身边を見廻して、既成服行商時代に見聞したトラック部隊事件を思いだし、それを材料として、殺人をからませてみようと思想した。トラック部隊事件とは、当時の左翼政党の一部の指導者が、製品のストックで喘いでいる鉄、繊維などの中小企業問屋や工場から、販路を手助けしてやるというて、製品をだまし取り、これを二足三文の値でたたき売って現金化し、問屋には納付せず、政党資金にしたというあくどい詐欺事件である。私は被害をうけた問屋も知っていたし、また、小さいながら、似たような商売を省みて、慄然ともし、『革命』や『思想』をふりかざしている人びとが、大企業ならまだしも、零細な小企業を倒産させて、昂然としている態度に憤りを感じて、その思いをぶつつけてみようとしたくらんだのである。既製服問屋の社長が、主人公になるのは、つまりは、行商で知悉した世界だったからである。

この文章の少し後に、『霧と影』は刊行されるや反響を呼び、いろいろな人から誉められ、「私は一躍社会派の推理作家となった」とあるように、これは当時の松本清張人気で沸いていた「社会派」を意識し、さらには『水上勉社会派傑作選』シリーズの第一巻目のあとがきともなるのをよく意識して書かれた、作品の成立事情といえよう。そうした事情を差し引くとしても、「作者のうらみつらみ」の

社会的な広がり、はつきりと具体的に記されている。

ここには、作者の行商体験が、当時垣間見た「トラック部隊事件」⁽¹⁾にまで押しひろげられ、さらには、当時の革命政党への憤りが、大企業と中小企業の圧倒的格差への怒りが示されている。水上勉の従来の「文学よりも必死なもの」である「経済」体験が、個人的な行商体験に限定されるものではなく、同時代の社会に広がっていたことを示す。この社会的な広がりをもそのまま小説に組み込むためにこそ、松本清張の新しい推理小説の方法が大いに役立ったのである。もともと、『冬日の道』に記されていた「作者の恨みつらみをつめこむことが出来る気がした」あるいは「自分が過去に経験したいろいろの事どもを詰めこんでみよう」という水上勉の思いは、こうした同時代の経済や政治のあり方への「恨みつらみ」にだけよるものではない。「既製服問屋の社長が、主人公になるのは、つまりは、行商で知悉した世界だったからである」という言葉からもはつきり分かる。

『霧と影』で「主人公」といえば、ここで指摘される「既製服問屋の社長」すなわち石田寅造だけではない。詐欺にあった石田は物語冒頭で既に失踪し姿を消しており、物語に謎の人物として見え隠れするといえ、その姿を石田寅造として読者の前にあらわすのは物語の終結部である。こうした石田が「主人公」であるなら、福井県の小さな村外れで転落死した友人の死の真相を物語の表舞台で追う、毎朝新聞記者小宮雄介も「主人公」といわねばなるまい。また、詐欺事件を主導するばかりか次々に明らかとなる事件すべてにかかわる男、かつて「男子志を立てて猿谷郷を憎み出づ」との言葉を残

して若狭の郷里を出た宇田甚平こそ「主人公」という見方も成り立つだろう。

「作者の恨みつらみ」、「自分が過去に経験したいろいろの事ども」は、同時代の社会にかかわると同時に、作者の出自および来歴にも深く根ざしていたといつてよい。この意味で『霧と影』は、水上勉にとって私小説的側面と、社会的な広がりをもつ推理小説的側面を併せもった作品であつた。私小説的側面に傾斜するなら当初のタイトル「箱の中」であり、社会的な広がりをつよく意識するなら「霧と影」だろう。両者を併せもつとはいえず、『霧と影』は、前者から後者への重心移動をあらわす作品とみななければならない。

4 『日本の素顔』の「奇病のかげに」の衝撃

『霧と影』は好評だったが、まだ次回作の注文はない。そんな折、「テレビをみていて、熊本に起きた水俣病の悲惨さにびつくりしたのは間もなくである。私は、なけなしの金をもつて、南九州に出かけた。あてもない旅であつた。水俣市へゆき、つぶさに、患者の症状や工場の実情をみた」（『冬日の道』）。ほぼ十年の後の回想である。この急な水俣行きについても水上勉はくりかえし書いている。そのひとつ、『海の牙』が収められた『水上勉全集』第23巻の「あとがき」⁽¹⁷⁾では、水俣行きの前後がいつそう詳しく記されている。

『霧と影』が刊行された直後、昭和三十四年の秋、九州熊本県下⁽¹⁸⁾に起きていた水俣病に関心をふかめた。当時はまだ「水俣

奇病」といわれていた頃で、工場汚水が原因のようだが、確たる証拠がないため、政府も傍観しているといったありさまで、病人の方はふえる一方、病状の残虐さも目にあまつていた。NHK「日本の素顔」は、奇病の実態をうつした。画面に、骨と皮だけの人間が大写しにされ、コップの水さえ呑めぬほどにふるえている老人。地獄草紙をみるような光景に、わたしはいたたまれなくなつた。テレビを消したあと、すぐ熊本ゆきを思いついて、妻から三万円あまりの金をもらつて、翌日出発した。熊本に下車して、「熊本日日新聞」の原田さんに会い、水俣市へ向かった。湯ノ児温泉に投宿、約二週間、原田さんの紹介もあつて、奇病の患者宅、病院、工場、熊本大学、県庁を訪ね、この事件の底のふかさに唖然とした。素人の私の目にさえ、工場犯人説はうごかぬことのように思えた。奇病などというものではなく、これは白昼起きている企業殺人だつた。

これとほぼ同じことを、テレビ番組にそくして述べているのが、『海の牙』について⁽¹⁹⁾である。「ある日、NHKのテレビをみていたら、熊本県水俣市に起こつた奇病の実態を画面にうつして、アナウンサーは、気の毒な瀕死の患者たちの顔をカメラでなめながら、この恐ろしい病気の原因は、いまだにわからず、工場の放出する廃液中にふくまれる水銀の影響だという説は、確定的とはいえない、といい、凡そ四十九人の死者が出たのに、未だにその病因の究明されない点は不幸というべきで、患者たちは、工場廃液説をとつて、日夜の陳情をつづけているが、工場は関知しないことだとなつてねて、

見舞金さえ出してゐず、また、政府もこれを手をこまねいて眺めている実情である、という意味のことをいつている。私は驚いた。これは白昼堂々と、大衆の面前で演じられている殺人事件ではないか。どこかに犯人がいるはずだ。一つ実情を見てみよう」。長く引用したのは、アナウンサーの語りを一文で再現しようという試みに注目したいからである。言葉だけではあるまい。番組を観ながら水上勉は、アナウンサーの語りの言葉を書きとり、その言葉からはみ出してしまふ凄惨な光景を筆写していたにちがいない。

NHKの『日本の素顔』は、一九五七年一月から一九六四年の四月まで、NHKテレビで毎週日曜の夜、放映されていたドキュメンタリー番組である。その第九十九集にあたる『奇病のかげに』は、一九五九年一月二九日、二一時三〇分から二二時まで放映された。水上勉は、この番組を観てすぐ、水俣行きを決め、翌日三〇日に東京を発つたことになる。

もちろん、この水俣行きには作家としての野心もあった。「金閣と水俣」では、「出かけた理由に水俣について何か書いてみたい下心がもちろんあった。貴重な金をつかうのである。ただでは帰れない」と記している⁽¹⁹⁾。また、番組以前に新聞ですでにこの「奇病」にふれていたらしい記述もある⁽²⁰⁾。しかし、番組を観て即座に水俣行きを決め、翌日水俣に向かったことは、水上勉にとって、いかにこの映像が衝撃的だったかを物語る。

後に水俣病研究の中心となる原田正純も、学生時代に、この番組を観ていた。現在も読み継がれる岩波新書版『水俣病』（一九七二）の「はじめに」は次のように書きだされている。「私が水俣病とはじ

めてかわり合いを持ったのは、昭和三五年である。実は、その前昭和三十四年十一月、NHKのテレビ番組『日本の素顔』水俣病患者のフィルムを見て、たいへんなショックを受けたことがあるが、そのときは、水俣病がその後、私とどのように深くかわつてくるかについては思い及びもしなかった⁽²¹⁾」。当時は熊本大学の大学院生で、水俣病の患者との実際の出会いのはじまりは三六年六月だったと記す。ここからも、番組を観た翌日に水俣へと発つた水上勉の行動が際立つというべきだろう。

およそ六年半にわたり全三〇六本が放映された、「日本のテレビ・ドキュメンタリーの草分け」と称される『日本の素顔』については、NHKアーカイブ・トラリアル研究が二〇一〇年に始まってから研究が加速している。宮田章による研究には、全三〇六作品が、担当したディレクター名と簡単な内容紹介を付せられリスト化されている⁽²²⁾。

「奇病のかげに」は、「これは誰にその責任があるか、世にも不思議な病気の話です」漁民の声の録音を多用して水俣病を世に知らしめた一作⁽²³⁾で、ディレクターは小倉一郎である。

この番組の前後のタイトルをいくつかひろくと、第九十二集「泥海の町―名古屋市南部の惨状―」、第九十三集「川に映った東京」、第九十四集「ボタ山は訴える」、第九十五集「歌舞伎―その社会と伝統―」、第九十六集「国鉄ローカル線」、第九十七集「板ばさみ」、第九十八集「三軍人生」、第百集「孤独の島 沖縄」、第百一集「台風孤児」、第百二集「自衛隊」となる。

始まりつつあった高度経済成長の中で起きる出来事、事件を扱い、

優勢となる勢力の陰で、見捨てられ、あるいは取り残されてゆく場所および人々を主に描いているといつてよい。

『霧と影』以後、同時代の社会に注目していた水上勉は、「奇病のかげに」だけではなく、『日本の素顔』シリーズを観続けていたにちがいない。観る者に驚きをもたらす番組の中にあつても、「奇病のかげに」は水上勉を激しく揺さぶつたのである。後に、NHKの記念日番組のなかで、こう語っている。「『奇病のかげに』は日本の現実を先取りして告発した。今日の醜態を予告するものだったが、またわれわれは高度成長の端緒についたばかりで、それには触れずにビニール傘をさして成長をしてきた」⁽²⁴⁾。

5 「すべてを謎に」という意図

訪れた水俣で、水上勉は、いったいなにを見たのか。「金閣と水俣」「冬日の道」ほかでくりかえし書いているが、もつとも詳細に語っているのが、「不知火海、ふるさと若狭、それから…」と題された、「水俣病公式確認30年」記念講演である。⁽²⁵⁾ まず、『日本の素顔』にふれ、洋服の行商の頃扱っていた既製服が、番組に出てくる工場新日本窒素（現チッソ）でつくられたアセテート生地によるものだったのはいつそう関心をもたないわけにはいかなかった云々と述べた上で、こう続ける。

水俣について私が見たものはテレビに映った光景とはいささか違っていました。百間湾に直径一メートルほどの土管が口を

あけていて、米のとぎ汁のようなものがドクドク出ており、そこからさほど遠くない月の浦というところに患者さんが発生しているという事実でした。私は月の浦の一軒の家をたずねた。歩いていると地べたを這うようにして、よだれをたらした子が現れた。NHKが奇病と呼んだその障害をもつ少年と出会ったのです。一瞬、背筋が凍る思いでした。

私はフラフラとその家に入り込んで、六〇歳ぐらいのおじいさんと話をすることができました。おじいさんは奥からネズミのようにやせこけたネコを抱いてきました。この世のものとは思えなかった。歩き方も変で、よろけている。私は許しを得て、そのネコの写真を安物のカメラで撮ったが、そのとき手が震えたのを覚えております。

病気になったネコをあずけてあるのは熊本大学だから、そこへ行ってみたら、というおじいさんの紹介で熊大の助手さんを訪ねました。彼は百間湾の泥土をすくつてきて、その中でエビや貝を養ってそれをカラスに食わせる実験をしている教授の手伝いさんでした。水俣湾の魚介を食ったカラスは言語障害を起している、という話でした。カラスの言語障害の実態がどういうものか、素人のぼくにはわからないが、湾にたくさん有機水銀が流されて放つてあることは、たしかなようでした。

行政はどうしているか。県庁に行き話を聞き、この「奇病」をまったく放置しているのを確認、再び水俣に戻り、取材してまわった。東京に帰ってくると、文藝春秋社の編集者から短篇の依頼があつ

た。水俣でつけたノットを取り出して書きはじめたという。半月弱の早業で脱稿したそれが、『別冊文藝春秋』に発表した一三〇枚あまりの短篇小説、「不知火海沿岸」である。

しかし、水俣とのかかわりは「不知火海沿岸」では終わらなかった。『霧と影』の編集者だった坂本一亀が「あれでは水俣病の追跡は不発ではないか。最後まで書いてみないか」と言ってきた。そこでおよそ四カ月かけて三百枚をつけ足して長篇『海の牙』を完成させた経緯もまた、繰り返し書いている。編集者坂本の指摘と依頼をおおむね受け入れ、『海の牙』に力を注いだことを書いているのだが、それらは後年の感想であり、「不知火海沿岸」と『海と牙』について最も早く言及している一九六二年の『霧と影』『海の牙』を書いた頃⁽²⁷⁾には、「不知火海沿岸」という試みへの作者としての確信をはっきりと記していた。

「海の牙」はその年の十一月に、わたしが九州の熊本まで出かけて、この眼で見た水俣病事件を素材にしたものであった。「不知火海沿岸」という百二十枚の短篇で、別冊文芸春秋に発表したものだ。これを発表したことで、私は池島信平氏の支持を得た。私が一流雑誌に小説を発表した最初のことであった。この作品をよんだ坂本一亀氏はまた、私に、四百枚の加筆を申し込んできた。すなわち、「不知火海沿岸」では、尻きれとんぼで何らの解決がついていないから、完結させろというのであった。なるほど、「不知火海沿岸」には殺人はあった。しかし、なぜ殺されたのか。何故そんな死に方をしたのか。すべてを謎にして、

作者は読者と共に、犯人のことや、かなしい水俣病のことを考えようではないか、とつき放したところに意味があると信じていた。ところが、坂本氏の熱意ある再度のすすめで、私はこの殺人事件に犯人を出し、水俣病犯人を出す決心をした。「海の牙」は翌年三月に脱稿された。約半年かかったわけである。

この文章が、坂本のいる河出書房新社から出た本のあとがきの体裁で書かれたものであるのを考えあわせれば、「尻きれとんぼで何らの解決がついていないから、完結させろ」という「不知火海沿岸」＝未完成作品という認識への、精一杯の反発とみなすべきだろう。すなわち坂本の要求する「推理小説」としての解決、完結とはまったく異なる、水上勉なりの解決、完結のイメージを、このとき水上勉はいだいていた。

この時の水上勉の思いは、水俣病の「犯人」はほぼ工場と特定されながら、解決どころかその糸口さえ見いだせず、完結など及びもつかない、当時の水俣「奇病」の未解決、未完結と重なっていたにちがいない。

つまり、短篇小説「不知火海沿岸」には、『海の牙』に成立の過程で付け加えられた「推理小説」の結構とは別の意義があったといつてよいだろう。その「すべてを謎にして、作者は読者と共に、犯人のことや、かなしい水俣病のことを考えようではないか、とつき放した」態度によってこそ、決して完全な解決に至ることのない水俣「奇病」の解決不可能性を告発するという意義である。

結果的に水上勉の試みは、石牟礼道子の『苦海浄土——わが水

『²⁸水俣病』を頂点とする水俣病ルポルタージュ群にやや先行し、東京という当時の文壇の中心で水俣「奇病」への憤りを噴出させることになった。

今回は、こうした非「推理小説」的な文学のあり方を模索した「不知火海沿岸」の試みを、詳細に論じたい。

—注—

- (1) 『金槌の話』、『戦争と文学全集 第七巻 ヒロシマ・ナガサキ』(二〇一一年九月 集英社刊) 所収。
- (2) 『若狭がたり——わが「原発」撰抄』(二〇一七年三月 アーツアンドクラフツ刊)。
- (3) 『金閣と水俣』、『金閣と水俣』一九七四年一月 筑摩書房刊) 所収。雑誌『世界』一九七四年三月号に発表された。
- (4) 『不知火海沿岸』は、『別冊文藝春秋』一九五九年二月に発行された新春特大号に掲載された。目次には「新人による異色あるスリラー、水俣病発生によって暴動化する地方都市を中心に謎の殺人事件勃発!」と謳われている。なお作中、水俣病は「水濁病」と虚構化されており、結果的には後に新潟県阿賀野川下流域を中心にあらわれた第二水俣病(新潟水俣病)とも繋がることになる。
- (5) エッセイ『冬日の道』は、『東京新聞』の一九六九年一〇月二〇日から二月二六日まで連載された。引用は、『冬日の道』(一九七〇年三月 中央公論社刊、76ページ)より。
- (6) 注5に同じ。引用は77ページより。
- (7) 『水上勉全集 第26巻』中央公論社、一九七八年一月、472ページ。なお、『水上勉全集』は生前全集として、中央公論社より旧編二十六巻、新編十六巻が出版されている。しかし、いわゆる大衆作家の全集が多くそうであるように、底本の明示や校訂に飽き足らぬ点があるため、本稿では水上勉の文章の引用を、可能な限り初刊行本から行うものとする。作家の全体

像を見るうえで、作品生成と改変の視点は避けがたく、その意味でも本論から始める水上勉研究に意義があると信ずる。

- (8) 注5に同じ。引用は77ページより。
- (9) 注5に同じ。引用は80ページより。
- (10) 『推理小説の魅力』、松本清張『随筆 黒い手帖』(一九六一年九月 中央公論社刊) 所収。
- (11) 注10に同じ。引用は25ページより。
- (12) 注10に同じ。引用は30ページより。
- (13) 注5に同じ。引用は80・81ページより。
- (14) 『霧と影』『果の絵』について、『水上勉社会派傑作選1 霧と影・果の絵』(一九七三年一月 朝日新聞社刊) 所収。続く引用は、373ページより。
- (15) 当時の日本共産党による地下資金工作部隊のこと。一九五七年八月三日の朝日新聞朝刊は、『トラック部隊』手入れ けさ東京・大阪十数カ所の見出しで、以下のように報じている。「警視庁捜査二課と公安一課は、一年余にわたり日本共産党が背景だといわれる会社収奪犯罪の内偵をつづけていたが、二十二日早朝、大阪府警の協力を求め、東西捜査陣が呼応して第一次の一斉捜索、検挙を開始することになった。」「日共内の暗号で『トラック部隊』事件と呼ばれているこの資金調達工作は、去る二十五年六月、日共幹部が第一次追放をうけ、地下活動が行われるようになってから『日米反動資本家からの収奪と政府の資金取奪は階級闘争である』との行動綱領のもとに活発になり、あらゆる手段で資金の獲得が行われたという。この一例として昨年五月、警視庁捜査二課と東京久松署の手で摘発された株式会社「織研事件」は、逮捕された元全通中央委員村井繁が社長となり、去る二十九年八月同社を設立、業界新聞を発行するなど一年半の間に中小企業から紙類や繊維品を買い込み、それを投売りし一億数千万円の取込み詐欺をした。同社社員は八割までが日共党員であった。当局ではその後同事件は氷山の一角であるとして秘密裡に追及を続けてきた。全集年譜の一九五三(昭和二十八年)年の項には、『織研経済研究所に勤め、『月刊織維』の編集に従事する』とあるが、『織研』は水上勉が勤めた繊維経済研究所を母体として生まれた。一九五六年度の『織研事件』発覚当時、水上勉は

友人と始めた東京服飾新聞が潰れたため、洋服の行商をしていた。

(16) 注5に同じ。引用は92ページより。

(17) 『水上勉全集 第23巻』(中央公論社、一九七七年一月)所収。次の引用は、639ページより。

(18) 『海の牙』について、『水上勉社会派傑作選2 海の牙・爪・耳』(一九七二年一〇月 朝日新聞社刊)所収。続く引用は、422、423ページ。

(19) 注3に同じ。引用は216ページより。なお「金閣と水俣」では、世話になった熊本日日新聞の記者は、他の文章での「原田謙次郎」「原田さん」とは異なり、「平山謙一郎」となっている。

(20) 注3に同じ。水上勉が新聞で水俣病を知っていたとすれば、一九五九年一月三日の『朝日新聞』による報道以後であろう。「水俣病 8年の停滞期(戦後50年 メディアの検証16)」「(朝日新聞)一九五九年五月二十七日朝刊」には、「五九年七月、朝日は熊大水俣病研究班が原因として有機水銀を突きとめたことをスクープした。だが、東京紙面ではボツだった。『中央の学者から批判が出たのが痛かった』と当時の西部本社通信部デスクはいう。／同年十一月、漁民が向上に乱入した事件で、全国ニュースになった工場の門を破った漁民の一人は二十六日後に水俣病で悶死した」とある。この事件は、一九五九年一月三日の『朝日新聞』朝刊で報じられている。「全国ニュース」となった最初である。とはいえ、見出しは「水俣病(熊本県)で漁民騒ぐ」「警官72人が負傷 新日窒工場に押しかけ」となっていて、石を投げる漁民と、破壊された新日窒事務所の大きな写真が掲載され、表向きは漁民の暴挙を非難する印象の記事である。この記事の末尾には、『水俣病』とはとして以下の文が載っている。「昭和二十八年十二月、熊本県水俣市の漁業部落で発生した。六年経ってもまだはつきりした原因もわからず、従って決定的な治療法もない。水俣市に工場を持つ新日本窒素の工場排水が原因ではないかとする一部学者の説に対し、日本化学工業協会の一部では、旧日本海軍が水俣湾内に捨てた爆弾類の影響ではないかと主張、対立している。現在までに水俣市に隣接する同県芦北郡津奈木村などで七十六人が発病、うち二十九人が死んだ。水俣湾でとれた魚を食べると手足がしびれ、やがて言語障害を起し目や耳までも機能がダメになる。

ネコなど発病すると逆立ちして歩き、ついには狂いだして海に飛び込んで死んでしまうという世界でも類のない奇病といわれる」。水上勉が番組の前に新聞で「奇病」に接していたとすれば、この「全国ニュース」となった記事が初めてのものと考えられる。

(21) 原田正純『水俣病』岩波新書、一九七二年二月、引用はiページより。

(22) 宮田章『日本の素顔』と戦後近代―テレビ・ドキュメンタリーの初期設定【第一回】現実が「コンテンツ」になった時(放送研究と調査)二〇一四年八月。引用は46、57ページより。

(23) 注21に同じ。引用は、49ページより。次に挙げるタイトルも同頁。

(24) 桜井均・東野真「制作者研究(テレビ・ドキュメンタリーを創った人々)【第一回】小倉一郎(NHK)〈映像と音で証立てる〉(放送研究と調査)二〇二二年一月。引用は13ページより。この論文では、現存する「奇病のかげに」からは貴重な場面が消えていること、水上勉が『海の牙』で再現していることが指摘されている。今回の拙稿で詳しく検討したい。

(25) 「不知火海、ふるさと若狭、それから……」(朝日ジャーナル)一九八六年五月二三日号。同年五月一日の講演に手を加えた、とある。次の引用は12ページより。

(26) 注17の『水上勉全集 第23巻』「あとがき」や注5のエッセイ「冬日の道」、「霧と影」「海の牙」を書いた頃」など。記述にわずかずずれがあり、直前の坂本一亀の言葉は『水上勉全集 第23巻』「あとがき」(640ページ)、対して「冬日の道」では「あれではしり切れとんぼだ、何の解決もついていない、一挙に三百枚ほどつけ足して本にしてみないか、といった」(「冬日の道」92ページ)と書かれている。

(27) 「霧と影」「海の牙」を書いた頃、「カワデ・ペーパーボックス6 霧と影海の牙」(一九六二年八月 河出書房新社)所収。引用は337、338より。

(28) 石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』は一九六九年一月に講談社から刊行。ここにまとめられた水俣病をめぐる文章は、一九六〇年一月「サークル村」初出の「空と海のあいだに」から複数の雑誌に断続連載された。